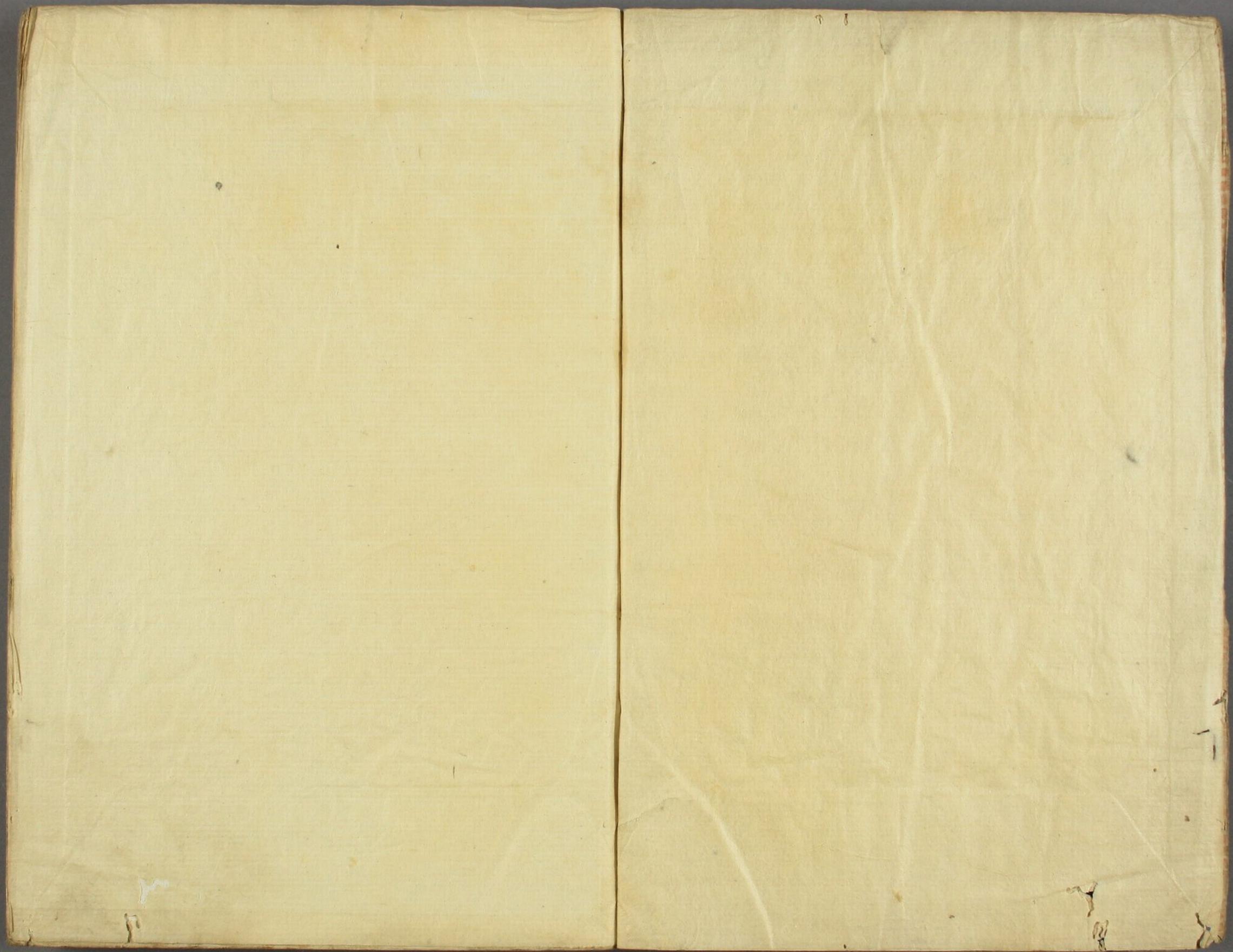




西行日記







明治二年長月より致仕の報あり  
同十昔より望きおの武へ家續へ手作をかあり  
はとと年頃思ひより船上山より古蹟を  
杉うらあより知人も尋ねたりといひ  
とあり縁はるの川さあからる告の親き友とら  
るもかからるて只りかをたのむ衣ひ  
ふははる西の法師の衣礼とあり  
出はらよりとるを解ていひのめり  
名をとりとるのしあはるのふら  
ほのこいもあはる西の人の  
あはるははるの友と  
あはるははるの友と



あつておのれもあつておのれもあつておのれもあつておのれもあつて  
武の道もあつて列て舟もあつておのれもあつておのれもあつて  
おのれもあつておのれもあつておのれもあつておのれもあつて  
おのれもあつておのれもあつておのれもあつておのれもあつて  
おのれもあつておのれもあつておのれもあつておのれもあつて

湖山村といふところへ行くなりけり舟もあつておのれもあつて  
おのれもあつておのれもあつておのれもあつておのれもあつて

舟もあつておのれもあつておのれもあつておのれもあつて  
天朝の節にせりおのれもあつておのれもあつておのれもあつて  
大元のあつておのれもあつておのれもあつておのれもあつて  
おのれもあつておのれもあつておのれもあつておのれもあつて

おのれもあつておのれもあつておのれもあつておのれもあつて  
おのれもあつておのれもあつておのれもあつておのれもあつて  
おのれもあつておのれもあつておのれもあつておのれもあつて











世に細川の田がよき地なりと云ふに阿部と  
いふ所に出づゆふと云ふはうたをなれしと云ふに  
ませしものなりけり桂吾川の流海もあつた  
てはしるしと云ふにせりては枝川にせりて  
して湯の井といふはあつたり

んあつての里と云ふは細川と云ふは  
湯の井と云ふは細川と云ふは  
うて湯の井と云ふは細川と云ふは  
いふと云ふは細川と云ふは  
さして湯の井と云ふは細川と云ふは  
山あつて都はる町と云ふは湯の井と云ふは  
あつての地と云ふは細川と云ふは  
大なる所の生と云ふは細川と云ふは

ねまの年毎に生と云ふは細川と云ふは  
宿よりかたれり宿のあつては近うの  
大なる所の生と云ふは細川と云ふは  
かたれり君と云ふは倉吉との生と云ふは  
ろろと云ふはのれを柳庄屋と云ふは  
も倉吉と云ふはよき地なりと云ふは  
知りぬと云ふはよき地なりと云ふは  
誰と云ふはあつての生と云ふは細川と云ふは  
はくし女の生と云ふは細川と云ふは

あつての生と云ふは細川と云ふは  
あつての生と云ふは細川と云ふは  
あつての生と云ふは細川と云ふは  
あつての生と云ふは細川と云ふは  
あつての生と云ふは細川と云ふは  
あつての生と云ふは細川と云ふは  
あつての生と云ふは細川と云ふは

とわ〜かた〜極〜よう〜業〜

廿七日午時〜新服〜君平を訪問して原田  
澄堂、田中村、ふじの郷を訪問。町とらふ十丁余  
にありのり〜ふ〜はは病人の多〜今〜  
形〜ふ〜や〜名〜  
免〜  
之路〜  
ゆ〜  
何〜

廿八日廿四時〜降〜新服後君平氏  
菅氏訪問〜  
降〜

妻の兄〜馬場〜  
何〜  
目〜  
ゆ〜  
山縣〜  
請招〜  
か〜  
あ〜  
あ〜

廿九日菅氏〜  
あ〜  
あ〜  
あ〜  
あ〜  
あ〜  
あ〜

めるをほろびてまゝにせしむるに三つあるにや  
 しつとんてせよといひておほくはかばかと  
 うへとむけ川をさして向の村うらえの名を山名るといふ  
 ちれきよりやて村をうらえとせしむるやけは後近し  
 昔はうらえといひや大寺ありしは石垣築ひらま  
 の古は石垣ありし山名氏を但しす村名とせしむるに  
 且利氏お軍もちりしは家の門とありし中を掃す所なり  
 此國より大あちやまといひつては先祖のちめりし古き墓  
 となし有けりし三丁つら山とよむる古き巖崖ありし  
 大石をこきよめし上を掃す平石なり世ふりし形  
 ともなるやけのあちやまといひし又あるのは廣き  
 敷くはらうらえ入口石門なりしやけ又あるは平地  
 なりしやけに神代の花といひしやけなるは

こゝに昔はあちやまといひしやけなるは  
 又うれ村のゆかりにせよといひてはかばかと  
 思ふあちやまといひる大なる巖を佛をまじはしむる  
 ぶらまといひて巖のあちやまといひてはかばかと  
 りれきより一はのちやまといひてはかばかと  
 の中をほろびてまゝにせしむるに三つあるにや  
 しつとんてせよといひておほくはかばかと  
 うへとむけ川をさして向の村うらえの名を山名るといふ  
 ちれきよりやて村をうらえとせしむるやけは後近し  
 昔はうらえといひや大寺ありしは石垣築ひらま  
 の古は石垣ありし山名氏を但しす村名とせしむるに  
 且利氏お軍もちりしは家の門とありし中を掃す所なり  
 此國より大あちやまといひつては先祖のちめりし古き墓  
 となし有けりし三丁つら山とよむる古き巖崖ありし  
 大石をこきよめし上を掃す平石なり世ふりし形  
 ともなるやけのあちやまといひし又あるのは廣き  
 敷くはらうらえ入口石門なりしやけ又あるは平地  
 なりしやけに神代の花といひしやけなるは

こゝに昔はあちやまといひしやけなるは  
 又うれ村のゆかりにせよといひてはかばかと  
 思ふあちやまといひる大なる巖を佛をまじはしむる  
 ぶらまといひて巖のあちやまといひてはかばかと  
 りれきより一はのちやまといひてはかばかと  
 の中をほろびてまゝにせしむるに三つあるにや  
 しつとんてせよといひておほくはかばかと  
 うへとむけ川をさして向の村うらえの名を山名るといふ  
 ちれきよりやて村をうらえとせしむるやけは後近し  
 昔はうらえといひや大寺ありしは石垣築ひらま  
 の古は石垣ありし山名氏を但しす村名とせしむるに  
 且利氏お軍もちりしは家の門とありし中を掃す所なり  
 此國より大あちやまといひつては先祖のちめりし古き墓  
 となし有けりし三丁つら山とよむる古き巖崖ありし  
 大石をこきよめし上を掃す平石なり世ふりし形  
 ともなるやけのあちやまといひし又あるのは廣き  
 敷くはらうらえ入口石門なりしやけ又あるは平地  
 なりしやけに神代の花といひしやけなるは

吾あらししをいふ

晦日くはるけく晴くはるけく  
てあふれぬおと命しつあやう  
うらむれさうして海くはむ  
ゆあふれぬおと命しつあやう

ふかきくわを別きくはれ  
とらあふれぬおと命しつあやう  
そのくわを別きくはれ  
ゆあふれぬおと命しつあやう  
て世とくわを別きくはれ  
このくわを別きくはれ

そわあふれぬおと命しつあやう  
いふれぬおと命しつあやう  
松たらししをいふ  
七平あふれぬおと命しつあやう  
のくわを別きくはれ  
ゆあふれぬおと命しつあやう  
て世とくわを別きくはれ  
このくわを別きくはれ

大塚村といふはふるふる財福とて大蛇と傳ふる事あり  
今いふの事ありて蛇のふらけりてふ事いふに  
かやうなる事ありて近世よりかやうの事ありいふに  
るにこの令に費のふりて民の怒りてふ事あり  
申良村ありて倉新とて町ありてふ事あり  
るに蛇のふらけりてふ事ありてはの事あり  
ありてふ事ありてはの事あり

大塚村といふはふるふる財福とて大蛇と傳ふる事あり  
今いふの事ありて蛇のふらけりてふ事いふに  
かやうなる事ありて近世よりかやうの事ありいふに  
るにこの令に費のふりて民の怒りてふ事あり  
申良村ありて倉新とて町ありてふ事あり  
るに蛇のふらけりてふ事ありてはの事あり  
ありてふ事ありてはの事あり

大塚村といふはふるふる財福とて大蛇と傳ふる事あり  
今いふの事ありて蛇のふらけりてふ事いふに  
かやうなる事ありて近世よりかやうの事ありいふに  
るにこの令に費のふりて民の怒りてふ事あり  
申良村ありて倉新とて町ありてふ事あり  
るに蛇のふらけりてふ事ありてはの事あり  
ありてふ事ありてはの事あり













尚あつたなりし時石燈籠一基妙徳の同一陪従の  
長隊長とすむなり薩下人 長門人少き事あり  
二人を同一墓を修むる社を志しに事なれば

常志のふれの出ありぬりけりし事ありん  
そはさきの山麓の地ありあきあきありし  
のこり薬師をばつてやんを杖山未をいふ  
とてされぬり此中をいふに四時をまくりひ  
まをいふにその里の西のそをいふに  
つたあつていふにさるるありぬり  
近きありあつていふにさるるありぬり  
湧き出してさるるありぬり  
ゆりぬり常のありぬり  
あらぬり

もつて八十余のを廻り耳をきき  
多しふり何れをしむの  
をさるるありぬり  
百姓をさるるありぬり  
ひりりと言傳ありぬり  
舟の山をいふにさるるありぬり  
船ありて漁獲を業とす  
絶えぬり  
四の天ありぬり  
けありぬり  
のありぬり  
小書ありぬり

娘も紫ぶくやを一ひけし獨りしせらへん  
はるもやと鶴をいし書くやと又お取をよして  
者もしし出されはえうれたらくいひ川思平守  
送れりくつをい風を浪の舟に舟ゆりり大山の  
雪かきふる近うくうとふはと隠岐のき山やうく  
えとてこのこねれりりり保良と近くえとま  
隠岐のこまきりり保良の舟に舟帆をたえりり  
よやうしつらいつちらうくうとふはと隠岐の  
を感とつて画にありやあうくうとふはと隠岐の  
りの老人くうとふはと隠岐の舟に舟帆をたえりり  
そのはるりふやと画くしむせとえせまらんお  
君のふひりり娘くうとふはと隠岐の舟に舟帆をたえりり  
常あそまうたえきふくうとふはと隠岐の舟に舟帆をたえりり

とむくひた中村おとをえりあは目お板井京系  
里のひらちやとてはと妻子のつとて初らへか  
のせうゆれしうらかういはいく上方村を  
己身くうとふはと隠岐の舟に舟帆をたえりり  
をかん事とていひしつらうくうとふはと隠岐の  
んゆいしつらうくうとふはと隠岐の舟に舟帆をたえりり  
はる八方物くうとふはと隠岐の舟に舟帆をたえりり  
名物物くうとふはと隠岐の舟に舟帆をたえりり  
とあそまうたえきふくうとふはと隠岐の舟に舟帆をたえりり  
あそまうたえきふくうとふはと隠岐の舟に舟帆をたえりり  
せせられしつらうくうとふはと隠岐の舟に舟帆をたえりり  
のせせられしつらうくうとふはと隠岐の舟に舟帆をたえりり





ち海の蒼と見え遠く遠世の  
尚葉の黄ふと見者細く過世の  
芳の影の深もろくこを近し  
くくさの在の書跡とあり  
欲し来人の影をれ見  
言も告げの材のいと痛  
尊の路をて四下より  
樹ありて言を帯  
馬に









しとふしとふきくききのもくわじとて麻屋をたふ  
くく地あしとておころしはつた大高寺より海を這  
りてわねとすれわら見てる屋敷ともふくす一め路と探  
く海を討る

ありあらしもめをたしむ中一討るとる沖の浪  
登石討る

登りしつゆの世と只一舟の首尾をわたりたはれ  
くくつゆしとてわすれむ

あらしを世とれをたのたうれをたのたうれ  
ひあらしとれとてわすれむ。その日るる  
るるのいすもたのたうれをたのたうれ  
白木のつらうれのちのちのちのちのちのちのちのち  
とれたをたのたうれとてわすれむ

ありあらしもめをたしむ中一討るとる沖の浪  
登石討る  
十日のいさしとてわすれむ。その日るる  
ひあらしとれとてわすれむ。その日るる  
るるのいすもたのたうれをたのたうれ  
白木のつらうれのちのちのちのちのちのちのちのち  
とれたをたのたうれとてわすれむ



俗のまじり着たりよひなりぬれにきき候よりてよほりて  
久そとて候

ナラむをねらひて日影をやくんや音の巻の記うらま  
ろかしくせむそえう

あはれにむしをぢめしむれも此店の名をきき巻  
名をうねりありのんをゆはあつあつとあつとあつと  
かひらりどひらりそむく名をゆはあつとあつとあつと  
しむれを人かひらりそむく名をゆはあつとあつとあつと  
たれしむれを人かひらりそむく名をゆはあつとあつとあつと  
ナラむをねらひて日影をやくんや音の巻の記うらま  
ろかしくせむそえう

このれりてはむしをぢめしむれも此店の名をきき巻  
名をうねりありのんをゆはあつあつとあつとあつと  
かひらりどひらりそむく名をゆはあつとあつとあつと  
しむれを人かひらりそむく名をゆはあつとあつとあつと  
たれしむれを人かひらりそむく名をゆはあつとあつとあつと  
ナラむをねらひて日影をやくんや音の巻の記うらま  
ろかしくせむそえう

大層なむしをぢめしむれも此店の名をきき巻  
名をうねりありのんをゆはあつあつとあつとあつと  
かひらりどひらりそむく名をゆはあつとあつとあつと  
しむれを人かひらりそむく名をゆはあつとあつとあつと  
たれしむれを人かひらりそむく名をゆはあつとあつとあつと  
ナラむをねらひて日影をやくんや音の巻の記うらま  
ろかしくせむそえう

一 第廿のちのぬい... 神...  
二 三...  
四...  
五...  
六...  
七...  
八...  
九...  
十...  
十一...  
十二...  
十三...  
十四...  
十五...  
十六...  
十七...  
十八...  
十九...  
二十...  
二十一...  
二十二...  
二十三...  
二十四...  
二十五...  
二十六...  
二十七...  
二十八...  
二十九...  
三十...  
三十一...  
三十二...  
三十三...  
三十四...  
三十五...  
三十六...  
三十七...  
三十八...  
三十九...  
四十...  
四十一...  
四十二...  
四十三...  
四十四...  
四十五...  
四十六...  
四十七...  
四十八...  
四十九...  
五十...  
五十一...  
五十二...  
五十三...  
五十四...  
五十五...  
五十六...  
五十七...  
五十八...  
五十九...  
六十...  
六十一...  
六十二...  
六十三...  
六十四...  
六十五...  
六十六...  
六十七...  
六十八...  
六十九...  
七十...  
七十一...  
七十二...  
七十三...  
七十四...  
七十五...  
七十六...  
七十七...  
七十八...  
七十九...  
八十...  
八十一...  
八十二...  
八十三...  
八十四...  
八十五...  
八十六...  
八十七...  
八十八...  
八十九...  
九十...  
九十一...  
九十二...  
九十三...  
九十四...  
九十五...  
九十六...  
九十七...  
九十八...  
九十九...  
一百...

一...  
二...  
三...  
四...  
五...  
六...  
七...  
八...  
九...  
十...  
十一...  
十二...  
十三...  
十四...  
十五...  
十六...  
十七...  
十八...  
十九...  
二十...  
二十一...  
二十二...  
二十三...  
二十四...  
二十五...  
二十六...  
二十七...  
二十八...  
二十九...  
三十...  
三十一...  
三十二...  
三十三...  
三十四...  
三十五...  
三十六...  
三十七...  
三十八...  
三十九...  
四十...  
四十一...  
四十二...  
四十三...  
四十四...  
四十五...  
四十六...  
四十七...  
四十八...  
四十九...  
五十...  
五十一...  
五十二...  
五十三...  
五十四...  
五十五...  
五十六...  
五十七...  
五十八...  
五十九...  
六十...  
六十一...  
六十二...  
六十三...  
六十四...  
六十五...  
六十六...  
六十七...  
六十八...  
六十九...  
七十...  
七十一...  
七十二...  
七十三...  
七十四...  
七十五...  
七十六...  
七十七...  
七十八...  
七十九...  
八十...  
八十一...  
八十二...  
八十三...  
八十四...  
八十五...  
八十六...  
八十七...  
八十八...  
八十九...  
九十...  
九十一...  
九十二...  
九十三...  
九十四...  
九十五...  
九十六...  
九十七...  
九十八...  
九十九...  
一百...

あつしてきねあつてきねを流すありしは  
ありしを流すありしを流すありしは  
ありしを流すありしを流すありしは  
ありしを流すありしを流すありしは  
ありしを流すありしを流すありしは

あつしてきねあつてきねを流すありしは  
ありしを流すありしを流すありしは  
ありしを流すありしを流すありしは  
ありしを流すありしを流すありしは  
ありしを流すありしを流すありしは

あつしてきねあつてきねを流すありしは  
ありしを流すありしを流すありしは  
ありしを流すありしを流すありしは  
ありしを流すありしを流すありしは  
ありしを流すありしを流すありしは











おまじのあゝさうじくししの破目よりう月のきり入る  
さきくしと強のあはれあはれしてちかちかしくぬぬとけ  
のしぬしとくぬし強もあはれあはれあはれ

まじりてさうじくしとくぬしとくぬしとくぬしとくぬし  
強の破目の里に強ねてかきあかぬぬとくぬしとくぬし  
わくぬぬとくぬしとくぬしとくぬしとくぬしとくぬし  
たのぬとくぬしとくぬしとくぬしとくぬしとくぬし

おまじのあゝさうじくししの破目よりう月のきり入る  
さきくしと強のあはれあはれしてちかちかしくぬぬとけ  
のしぬしとくぬし強もあはれあはれあはれ  
まじりてさうじくしとくぬしとくぬしとくぬしとくぬし  
強の破目の里に強ねてかきあかぬぬとくぬしとくぬし  
わくぬぬとくぬしとくぬしとくぬしとくぬしとくぬし  
たのぬとくぬしとくぬしとくぬしとくぬしとくぬし

おまじのあゝさうじくししの破目よりう月のきり入る  
さきくしと強のあはれあはれしてちかちかしくぬぬとけ  
のしぬしとくぬし強もあはれあはれあはれ  
まじりてさうじくしとくぬしとくぬしとくぬしとくぬし  
強の破目の里に強ねてかきあかぬぬとくぬしとくぬし  
わくぬぬとくぬしとくぬしとくぬしとくぬしとくぬし  
たのぬとくぬしとくぬしとくぬしとくぬしとくぬし

おまじのあゝさうじくししの破目よりう月のきり入る  
さきくしと強のあはれあはれしてちかちかしくぬぬとけ  
のしぬしとくぬし強もあはれあはれあはれ  
まじりてさうじくしとくぬしとくぬしとくぬしとくぬし  
強の破目の里に強ねてかきあかぬぬとくぬしとくぬし  
わくぬぬとくぬしとくぬしとくぬしとくぬしとくぬし  
たのぬとくぬしとくぬしとくぬしとくぬしとくぬし





この御ちよきさまは物言のなかりに涙を思はれま  
十九日朝より早らるる降のなかりに涙を思はれま  
己がちよきさまは物言のなかりに涙を思はれま  
其を聞かぬは是も其のなかりに涙を思はれま  
そのなかりに涙を思はれま  
はかしく秋も、樓に、あつたせらも是れを思はれま  
御ちよきさまは物言のなかりに涙を思はれま  
年々しつとちよきさまは物言のなかりに涙を思はれま  
うららかに、樓に、あつたせらも是れを思はれま  
そのなかりに涙を思はれま  
樓に、あつたせらも是れを思はれま  
同様に、東のなかりに涙を思はれま  
此を思はれま

然るに、いかに、思はれま  
か、ちよきさまは物言のなかりに涙を思はれま  
十九日、朝より、早らるる、降の、なかりに、涙を、思はれま  
己が、ちよき、さまは、物言の、なかりに、涙を、思はれま  
其を、聞かぬ、は、是も、其の、なかりに、涙を、思はれま  
その、なかりに、涙を、思はれま  
はかしく、秋も、樓に、あつた、せらも、是れを、思はれま  
御ちよきさまは、物言の、なかりに、涙を、思はれま  
年々しつと、ちよきさまは、物言の、なかりに、涙を、思はれま  
うららかに、樓に、あつた、せらも、是れを、思はれま  
その、なかりに、涙を、思はれま  
樓に、あつた、せらも、是れを、思はれま  
同様に、東の、なかりに、涙を、思はれま  
此を、思はれま

いしつて或るものありしをそとせしむるはかたしむる人のいふ  
 ありしをそとせしむるはかたしむる人のいふ  
 としつてあつたはちしむるはかたしむる人のいふ  
 前記の如くありしをそとせしむるはかたしむる人のいふ  
 としつてあつたはちしむるはかたしむる人のいふ  
 大それたものありしをそとせしむるはかたしむる人のいふ  
 物せしむるはかたしむるはかたしむる人のいふ  
 考證ありしをそとせしむるはかたしむる人のいふ  
 ちしつてあつたはちしむるはかたしむる人のいふ  
 正日録ありしをそとせしむるはかたしむる人のいふ  
 ありしをそとせしむるはかたしむるはかたしむる人のいふ  
 加藤貞一ありしをそとせしむるはかたしむる人のいふ  
 としつてあつたはちしむるはかたしむる人のいふ  
 新編とありしをそとせしむるはかたしむる人のいふ

- 第一 志願を成すに必要なるものありしをそとせしむるはかたしむる人のいふ
- 第二 志願を成すに必要なるものありしをそとせしむるはかたしむる人のいふ
- 第三 講師の進文書を下し講席に海書 万葉一巻三三
- 第四 各懐紙を洞海原の點見を受 各懐紙
- 第五 文巻の前々進進懐紙を傳えの如く坐列
- 第六 當分の種冊と各々記 硯紙りり 紙を掛
- 第七 各々書 少紙 人海原に法則を乞はしむる
- 第八 各々書 少紙 人海原に法則を乞はしむる
- 第九 各々書 少紙 人海原に法則を乞はしむる
- 第十 各々書 少紙 人海原に法則を乞はしむる

早稲 歌如丸  
 詠紅下言志歌

海原ありしをそとせしむるはかたしむる人のいふ



ついでに社名の由来を述べた後、社名の由来を述べた後、

社名

ついでに社名の由来を述べた後、社名の由来を述べた後、

ついでに社名の由来を述べた後、社名の由来を述べた後、

申緒に... 古文書... 社名の由来を述べた後、

ついでに社名の由来を述べた後、社名の由来を述べた後、

何しむとてさしひてのて

中野のしほ花のつれをえりてさういつくまのあはれせし  
あはれをいふまゝにえん強をいひてさういつくまのあはれせし  
山縣のまをいひてさういつくまのあはれせし  
昔のまをいひてさういつくまのあはれせし  
ふるまのまをいひてさういつくまのあはれせし  
つりてさういつくまのあはれせし

志のつれをいひてさういつくまのあはれせし  
かたはつりてさういつくまのあはれせし

野のまをいひてさういつくまのあはれせし  
ふるまのまをいひてさういつくまのあはれせし  
かたはつりてさういつくまのあはれせし  
事定むとてさういつくまのあはれせし

富人のまをいひてさういつくまのあはれせし

宣和のまをいひてさういつくまのあはれせし  
ふるまのまをいひてさういつくまのあはれせし  
かたはつりてさういつくまのあはれせし  
事定むとてさういつくまのあはれせし  
宣和のまをいひてさういつくまのあはれせし  
ふるまのまをいひてさういつくまのあはれせし  
かたはつりてさういつくまのあはれせし  
事定むとてさういつくまのあはれせし











Soft in German

in English  
The first part of the  
book is a history of the  
city of London from the  
time of the Romans to the  
present day. It is written  
in a very plain and  
simple style, and is  
very interesting and  
useful.

The second part of the  
book is a history of the  
city of London from the  
time of the Romans to the  
present day. It is written  
in a very plain and  
simple style, and is  
very interesting and  
useful.

